

あるある研修 「わかってる！…素直になれない子」

■ 主な内容

- ・ 保育園を経て満3歳から入園の年中男児 H児
- ・ 満3、年少の頃から「やだ」「嫌い」の言葉が多く、手が出ることも多かった。身支度に時間がかかった。
- ・ 進級当初、遊ぶ友達がなくて、ふらふらしている。
- ・ 友達をたたいてトラブルになる。「わかった」「ごめんなさい」と言うが、同じ事を繰り返す。
- ・ 注意された問いかけに「わからない」で済ませようとする。
- ・ Hくんは「嫌なことをする子」「悪い子」のイメージがついているのが気になる。

■ 幼児と保育者のようす

(自由遊びの時間、年長児が大きな砂山を作っていた)

A 児：「また遊ぶから壊さないでね。」と周りの子に伝える。

(周りの友達は片付けだけして、砂山を壊さずにいた)

(H児が来て、砂山を踏んで壊してしまう)

A 児：「やめてよ」

H 児：聞こえているが無視して壊し続ける。

(周りの子は呆然として見ているだけ)

(お部屋に年長児が来て、「やめてね」と伝える。クラスでも話し合う。H児に反省の様子は見られない。謝罪もない。)

保育者：「誰か見ていた人はいなかったの？」

B 児：「見てたよ」

保育者：「だめだよって教えてあげたの？」

B 児：だんまり

保育者：「みんなは緑組の仲間なんだから、優しく教えてあげて」

H 児：素直に聞こうとする姿勢は見られない

(読み聞かせで、自分の見たかった絵本が選ばれず、ぐずる)

C 児：「Hくん、我慢しなよ」

D 児：「明日、読んでくれるって」

(保育者になだめられる)

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 相手の思いに気付かず、素直に話を聞かないH児に、どのように関わったらよいと思うか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ クラスとして、どのように見ていったらよいと思いますか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「わかってる！…素直になれない子」

■ この園での取組

- 早朝から放課後までの保育になるため、担任以外の担当の先生からの様子も聞いている。反省会などを通して情報を共有している。
- クラスの活動では、意見を出してリーダーになってくれることもある。クラスの中では大きい存在であることは確かである。
- よいことは十分に認めている。
- クラスのみんなで話し合い、H児だけでなく、よいこと、悪いことを確認して、どうしたらよいかを考えさせ、気付くことが出来るように促している。
- 相手の目を見て話を聞くことを約束して、しっかり伝わるように保育者も同様に関わっている。

■ ワンポイント

- 相手にも思いがあることに、どう気付かせていくか。そしてどのように折り合いをつけていくかの経験を積ませていく。
- トラブルも経験であるが、悪く目立つことがないように、認める場面を増やし、クラスの一員として捉えていく。
- マイナスな声掛けが多くならないように、認められることを素直に受け取れる子にするためには、どうしたらよいか考えていく。

あるある研修 「自分のタイミング」

■ 主な内容

- ・ 3歳児に進級し、クラスに入る保育者の人数が減ったことで環境が変化したS児
- ・ 2歳児の頃は、担当職員が複数いたので、自分のペースで物事を進めることができた。
- ・ 活動の切り替わりが苦手で、遊びから生活への切り替えの際は、保育者と一緒に遊び続けたいと泣いて訴える姿があった。
- ・ ままごと遊びのあと、S児のペースを保障するとどうなるか。

■ 幼児と保育者のようす

(おままごと遊びから給食の時間へ切り替わる場面で)

担任：「みんなの作ったごちそうおいしかったね。今度は給食さんの作ったお昼ご飯を食べに行こう。」

S児：「やだ、まだ遊びたい」

(友達が片付ける様子を見て)

S児：「片付けない。まだやる。」大きな声で泣き出す。

(声を聞いて、職員室から主任が見に来た)

主任：「Sくんは、まだ遊びたかったんだね」

(担任に、他の幼児とクラスに戻るよう伝える)

(S児と主任の2人になる)

S児：「これも使う。これも…」と両手いっぱい遊具。

主任：「Sくん、たくさん使いたかったんだね。みんな給食を食べにいったけど、どうする」

S児：「遊ぶ！」

主任：「そっか、わかったよ」と見守る。

(5分程遊んで、S児がクラスの様子を見ると)

S児：「Sも給食食べる」

主任：「いいね。お片付けしたら食べに行こう」

S児：「うん」と言って素早く片付けをする。

主任：「みんなは、給食の前にトイレに行っていたけどSくんもいく？」

S児：「いく！」

(トイレの後、保育室に戻り、自分で給食の準備をして食べ始めた)

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 主任がS児の遊びを見守ったことにはどのような意図があったのでしょうか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ 子どもが「みんな」と一緒に活動を進めることが難しい場面ではどのような援助が必要となるか、また、効果的と考えるか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「自分のタイミング」

■ この園での取組

- 進級して環境が変わり、S児の思うようにならないことが増えて泣いたり、怒ったりして気持ちを表現することが多くなったと感じていた。
- S児の遊びたい気持ちが満たされれば、次の活動に移れるのではと思い、主任はあえて遊びを見守った。次は何の時間だから遊びを終えなくてはダメだとするのではなく、子どものやりたい気持ちを尊重して、子どもが自分から行動できるように援助を心がけている。
- 自分で給食の用意をした後は、スムーズに生活の流れに乗ることが出来た。S児が見通しをもって生活できるよう、活動の切り替わりを事前に知らせるなどの工夫をする。
- 生活や活動の中で、自分のペースやタイミングが合わないときに、まだやりたいと思ったり、やりたくないと思ったりするのは当然のこと。子どもが自分で考えて、主体的に行動できるようにすることを心がけて援助している。

■ ワンポイント

- 集団から外れてしまう子への関わり方や園全体の環境設定について、どのような工夫が出来るか考えてみましょう。
- 職員全体で課題や状況を把握し、その改善策を共有することで初めて、幼児教育の質につながるので、まずはできることからやってみましょう。

あるある研修 「えがおがふえたね」

■ 主な内容

- ・ 二学期が始まり、交友関係が深まってきた9月
- ・ 年少組から自分の思いが強くなって、笑顔があまり見られない緊張気味の4歳のM児
- ・ 頑固なところがあってトラブルになる場面もあった。
- ・ 初めてのことには「やらない」といって待つことが多い。
- ・ 無理強いをしないで、見たいという時に見学できるように配慮
- ・ 異年齢の関わりが自由遊びで多くなっていく。
- ・ バス通園で2歳のR児と仲良くなる。

■ 幼児と保育者のようす

(園バスからM児とR児が手をつないで降りてきた)

副園長：「Mちゃん、Rくん、おはようございます。」

M 児：「今日、Rくんと手をつないできた」

副園長：「あら、よかったね。ありがとうね」

M 児：「今日はMがRくんのお部屋まで連れて行くの」

副園長：「そうなの。よろしくね」(優しく見守りながら)

M 児：「Rくん大丈夫？上靴はける？」

R 児：「Mちゃん、一緒に遊ぼうね」

(M児はR児と手をつないでお部屋へ行く)

M 児：「K先生(R児の担任)おはようございます。」

(今まで見せたことのないほどの笑顔で挨拶をするM児)

(その後の自由遊びでもM児がR児に絵本を読んだり、一緒に遊んだりする姿が見られた。)

(数日後、先に登園していたM児が、園バスが到着したときに玄関まで来る)

M 児：「Rくん、来た？」

保育者：「Rくん、今日はお休みだって」

(がっかりして、自分の部屋に戻るM児)

担 任：「どうしたの、Mちゃん」

M 児：「仕方がない、今日は先生と遊ぶか」といっている。

(なかなか切り替えができないでいるM児の成長を感じる姿であった。クラスを越えたつながりで、登園が楽しみになり、笑顔が増えていった)

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 異年齢やクラスを越えた交流のよいところは何ですか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ 子ども達は保育の中で、自分の思いと違うときに気持ちを切り替えるのが難しいことがあります。そのようなときは、どのように対応しますか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「えがおがふえたね」

■ この園での取組

- M児は、新しい環境や初めてのことを苦手とすることがあり、自分の思いと違うことが起きると固まってしまうことがある。
- 自分の思いとは違うこと、例えば、「座りたいのに座れない」などが起きると、言い出せずに立ち止まり、動かない。母が予定のお迎えの時間より早く来たことで大泣きして帰らないと言ったこともあった。
- 見通しがもてるように予定を伝えている。新しい活動を行うときは、友達を取組を見ろという配慮をしていた。
- 自分と違う考えを言われると、その保育者のことは一切聞かなくなることがある。他の保育者が対応を代わることも多くあった。
- 気持ちの切り替えができるように待っていることもあったが、なかなか切り替わらずにいるので、一緒に遊んでいた友達が離れていくこともあった。そのたびに仲介をしながら、見守っていた。

■ ワンポイント

- 異年齢での関わりが増え、自分が役立っていることに喜びを感じ、成長したという自覚がもてた様子だった。
- 自分より小さいクラスの子ども達も柔軟に切り替えている姿を見ることで、刺激を受けて変化が出てきた様子であった。
- 無理強いせず、気持ちに寄り添い続けたことで、園で安心して自分を出すことが出来るようになった。待つ姿勢の大切さを学んだ。

あるある研修 「いやだ いやだ」

■ 主な内容

- ・各学年で理由は違うが必ず「いやだいやだ」がはじまる。
- ・情緒の安定や家庭環境、保育士や友だちとの関係、年齢的な発達段階、色々な子どもたちを取り巻く環境や人間関係、表現方法など考えながら、より子どもに寄り添った、子どもたちの主体性を前提とした関わり方を検討し合う。
- ・各クラス（学齢）で見られた「いやだいやだ」の発表。

■ 幼児と保育者のようす

0歳児 食事、着替えのときの「いやだいやだ」

1歳児 食事、着替えのときの「いやだいやだ」

2歳児 食事、着替え、排せつのときの「いやだいやだ」

（身の回りの事を）自分でする、しない

3歳児 食事、着替え、排せつのときの「いやだいやだ」

（身の回りの事を）自分でする、しない

4歳児 友だちと手を繋ぐ 保育士の声掛けに過剰反応

おもちゃの「先に使ってたトラブル」（謝る、譲れない）

5歳児 友だちと手を繋ぐ

おもちゃの「先に使ってたトラブル」（謝る、譲れない）

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 各学齢に合わせた保育者の関わり方を考える。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ 「いやだいやだ」の年齢よりもより強く出ている子に対しての関わり方の共有を行う。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「いやだ いやだ」

■ この園での取組

- 子どもたち一人ひとりに沿った関わりが、どの保育士でも理解しやすくなり、寄り添った関わりができるようになった。
 - 担任以外のクラスの年齢的な特徴もつかみやすくなった。
 - 担任がその子に向き合うために、他の保育士がフォローに入り、協力がしやすくなった。
 - 強いこだわりのある子への対応を保育者間で共通理解した事で、不用意に情緒を乱して、混乱させてしまうことが減った。
 - 気持ちの転換ができる声掛けを行うために、他の保育者の対応した声掛けを参考にした。
- 子どもの「いやだいやだ」を受け止める場面が増えた。

■ ワンポイント

- 保育士が情報を共有することで沢山のメリットが感じられたので、パート保育士等にも周知できるようにする。
- ポイントを分かりやすくまとめたものを保育士がいつでも見られるようにし、上手くいったかわりエピソード等を付箋で張り付けて、増やしていく。変わった状況には、随時担任が対応していく。

あるある研修 「いやだ、帰りたい」

■ 主な内容

- ・ 5月に家族の転勤により、年中児で入園した。
- ・ 集団生活に入るのが初めてだった。
- ・ 入園初日、両親、兄弟と共に登園した。
- ・ 玄関までは母親と一緒に入ることが出来たが、家族が帰ろうとすると追いかけていく。
- ・ 再度玄関まで来たところを、保育者が預かったが、両親が離れると泣いて「いやだ、帰りたい」と言って玄関から離れない。

■ 幼児と保育者のようす

保育者：「おはようございます。Aくんおはようございます」
 A 児：母の後ろにくっついている。
 保護者：「おはようございます。よろしく申し上げます。」
 「今日は、初めてなのでお昼なしで帰りたいのですが、何時に迎えに来たらよいですか」
 保育者：「11時30分にお昼の準備を行うので、その時刻に迎えに来てください。」
 保護者：「わかりました。」「ご飯前に来るからね。頑張っってね。」
 保育者：「Aくん一緒に行こう。」
 A 児：「ママ」（母を追いかける）（母と離れ泣く）
 保育者：「お友達もいるよ。Aくんは何が好きなのかな」
 A 児：「嫌だ。」と言って玄関の隅で外を見ている。
 在園児：「もうすぐホール遊びが始まるよ。一緒に遊ぼう。」
 A 児：…。
 保育者：しばらく、そっと見守る。他の園児がいないタイミングで「今なら誰もいないから荷物を置いてこようか」
 A 児：靴を脱ぎ、保育者と一緒に荷物を置きに行く。その後、また玄関に戻るが、保育者と色々な話をする。
 保育者：「もうすぐお迎えの時間だから、帰りの準備をしよう。」
 A 児：皆がいる保育室に荷物を取りに行き、笑顔で玄関に戻ってきた。
 （迎えが来ると、笑顔で走っていき、両親と降園した）
 （登園を嫌がるが多かったA児は、集団での楽しさ、友達との関わりを楽しさを味わい、集団生活に慣れてきている。

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 集団が初めての子どもには、どのような対応がよいのか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ 集団という大人数で過ごす環境が「怖い」と話す子どもに対してどのように不安を解消してあげるとよいのでしょうか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「いやだ、帰りたい」

■ この園での取組

- 入園初日の5月、両親と兄弟と共に登園してきた。両親と離れると泣いて「いやだ、帰りたい」と言った。長くは泣かなかったが、登園初日はほとんど玄関で過ごした。保育者も様子を気に掛けていた。
- 玄関で保育者や職員との関わりを笑顔で楽しむ姿が見られるようになったため、玄関が楽しい場所であると感じて保育室や集団に入ることを遠ざけてしまわないよう、様子を見ながら集団に促していった。
- 担任から活動内容を聞いて、活動が始まったタイミングで玄関にいるA児に声を掛け、楽しいことをしている様子を伝え、一緒に見に行こうと誘うと、初めはい「いかない」と言っていたが、保育者が活動の方へ行くと後ろをついて行った。タイミングよく誘うと集団に入って活動することができた。
- 少しずつ、玄関で過ごす時間が減っていき、保育室で遊ぶ姿が見られるようになる。好きな友達ができると登園後、スムーズに身支度を済ませられるようになる。
- 全体で行う朝の会は、ホールの端から参加していたため、自分のクラスに近いところで、列に並んで参加できるようにしていきたい。

■ ワンポイント

- 途中入園の子どもへの対応について考えてみる。
- 職員全員で子ども達一人一人を見ていく意識を再確認する。
- 職員全員で子どもの様子を共有することが出来るようにするため、環境の工夫をしていく。
- 保護者との関わりを大切にし、子どもの様子の情報交換ができるようにしていきたい。

あるある研修 「意欲的に集団遊びをするためには」

■ 主な内容

- ・ 3歳児のクラスで、「フルーツバスケット」の集団遊びをするとき、意欲的に遊びを継続していくための導入や展開を考えよう！

■ 幼児と保育者のようす

<クラス>

- ・ 3歳児、男児9名 女児6名 計15名、保育士 担任1名

<導入>

- ・ 「ケーキ」の絵本を読む。
- ・ 果物の出てくるゲームがあることを伝える。
- ・ 果物のペンダントに色を塗ることを伝える。

<活動>

- ・ ペンダントに色を塗る前に果物は何色か口頭で確認する。
- ・ 使う色のクレヨンだけ出し、ペンダントに色を塗る。
- ・ 用意したペンダントには毛糸のひもがつけてある。

<展開1>

- ・ 椅子を子どもたちと一緒にならべ、フルーツバスケットのルールを説明する。
- ・ 説明は口頭で伝え、一度ゆっくりやってみる。
- ・ ルール…鬼がペンダントにある果物を言う→言われた果物のペンダントをしている子が立つ→違う椅子に座る→座れなかった子が鬼になる
- ・ 次第に鬼になりたい子やルールがあまりわかっていない子など決まった子が座らなくなってくる。

<展開2>

- ・ 「フルーツバスケット」という魔法の言葉があることを伝える。
- ・ 「フルーツバスケット」というと全員が動かなければならない。
- ・ あまり雰囲気は変わらず決まった子が鬼になりたがり、飽きてしまう子がいた。

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 意欲的に活動に取り組むための導入を考えましょう。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ 意欲的な活動を継続していくための展開を考えましょう。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「意欲的に集団遊びをするには」

■ この園での取組

<導入>

- 朝からペンダントを保育室内に貼っておき、子どもたちが興味をもてるようにしていく。
- ペンダントで用意した果物の出てくる絵本と手紙がプレゼントとして届き、これからの活動への興味や果物についての具体的なイメージをもてるようにする。
- 手紙にはゲームで使うペンダントがお部屋にあることが書かれていて、子ども達はペンダントを1つ保育室内から見つける。

<活動>

- ペンダントの色を塗る時には、他の子も見てわかりやすいように色の確認をしていくが、その際導入で読んだ絵本を用いて実際の色を確認をする。
- 用意するペンダントのひもは、毛糸だと切れたりとれたりしやすいので、スズランテープをクリアテープで貼ったものを用意する。

<展開1>

- ルールを説明する際、引っ越しゲームのようにまずは立って他のところに座るということを保育士は入らず、全員が座れる状態で行い慣れていく。
- 決まった子が鬼になりたがる様子があれば、鬼にまだなっていない子を紹介し、拍手で表彰のようにしていく。

<展開2>

- 同じ果物が続いたり、同じ子が鬼になることが続いたりした場合には、保育士が鬼となり「フルーツバスケット」を魔法の言葉として紹介するなど雰囲気を変えていく。

■ ワンポイント

<更に意欲的に活動に取り組むために>

- 導入の際のペンダントは子どもたちが好きなものを取れなかったということがないように、何の果物かわからないように隠しておくことで、くじ引きのようになり、楽しい気持ちでどの果物でも受け入れやすくなる。
- 何度も同じ子が鬼になってしまった場合には、拍手のみの表彰だけよりはメダルや王冠など視覚に訴える小物を使った表彰にすると鬼にならなかつたらもらえるというワクワク感にもつながる。
- 子ども達の集中できる目安の時間を把握し、集中が切れる前に次の展開に切り替えられるようにすると、継続して長く遊んでいけるようになる。

あるある研修 「運動会に向けて」

■ 主な内容

- ・新しい学年、クラスに馴染み始めた5月の連休明け
- ・Aちゃんは、周りの子とのコミュニケーションが取りにくく、友達が嫌がる事（手が出る、物を壊してしまう、乱暴は言葉を言う等）が目立っていた。活動に対しても、理解力が低く、集中力が非常に短かった
- ・6月末に行う運動会に向けての取組が始まった
- ・年長児は組体操を行う為、2人組や3人組、全員技など友達と協力して行う技が多い
- ・保育者は、Aちゃんの傍に付き怪我に繋がらないようサポート
- ・Aちゃんはなかなか、友達と力を合わせて取り組みをする事が出来ず、ある日、2人組を行っていた時、Aちゃんがふざけ始め一緒に行っていたBちゃんがバランスを崩して転倒。Bちゃんは大号泣。
- ・その様子を見てAちゃんは翌日の取組から、最後までやるようになった。

■ 幼児と保育者のようす

（組体操の2人組として、背中の上に乗る技の取り組み中）
 A 児：「あー、もう。痛いんだよなー」
 保育者：「背中にお友達に乗ってるから重いし、痛いよね。」
 （A児は組体操の取り組みに限らず、面倒、やりたくないと言ったマイナスイメージの発言が多かった）
 （A児がわざと体を揺らしたり、寝そべろうとする）
 （Aちゃんは取り組み開始当初から、毎回こういう行動をとっていた）
 B 児：「Aちゃん！やりにくいから、それ止めて！」
 （その後、バランスを崩して、B児は転倒。）
 （保育者が抱えて怪我無し。だが、自分のグループだけ、上手くいかず、B児の感情が爆発）
 B 児：「もう！！Aちゃんとは組体操やらない！出来ない！もうお家に帰る」と大号泣。
 保育者：「Bちゃん一生懸命頑張ってる、なかなかうまくいかないの悲しいね。」
 （まずはB児へのサポートへ。A児の様子や表情を見ると、いつも穏やかなB児が怒って泣いている姿を目の当たりにし、今まで見せた事がないような「…どうしよう」といった表情を浮かべていた。この日は、ここで組体操の取組を終了する。B児も落ち着きを取り戻したところで、補助の先生にクラスをお願いしてA児との時間をつくる。）
 保育者：「Bちゃん沢山泣いてたね。どうして沢山泣いたんだろうね」
 （Aちゃんは、無言でうつむき、周りを見ていたが、急に保育者の目を真っすぐ見て）
 A 児：「こーやってフリフリした（上に乗ってる時に体を揺らした）から」と話す。
 保育者：「次は一緒に最後まで、出来るといいね」
 A 児：「最後まで一緒に出来たらいいなー。ごめんねって言うかー」と話し、Bちゃんに「さっきはさー、ごめんね」と伝えに行った
 （この日以来、Aちゃんはわざと体を揺らしたりする事は無く、最後までやり遂げる事が出来るように。そしてAちゃんが困っていると、Bちゃんが必ず助けてくれるようになった）

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 保育者は、A児が「痛い、重たい」といっているとき、「最後までやりなさい。危ない。」と言わずに見守っていたのはどういう意図だったのでしょうか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ 対応が難しい子に対して、集団としての体験、その子の役割を充実させ、クラスの子達にその子のよさが伝わるように、あなたならどのような支援をしていきますか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「運動会に向けて」

■ この園での取組

- 年少・年中・年長と様子を見てきて、なかなか集団としての活動に入れず、友達とのトラブルが多かった事を全職員が把握してサポートしていた。
- 年長になり、言葉の理解も進んで、友達との会話を楽しむ様子や、同じ遊びを理解してぼうとする姿が見られ始めていた。
- 運動会の年長競技は、友達と力を合わせて取り組むものが多くAちゃんにとって自分以外の存在をより深く感じ、誰か一緒に何かをする事は楽しい事だと感じてもらえるきっかけとなるようなサポートをしていきたいと考えていた。
- 運動会の取り組み開始当初は、Aちゃんの姿を見て正直、不安や心配があった。一緒に組んでいたBちゃんは年少・年中と同じクラスでAちゃんの様子を感じていた子だったが、そのBちゃんが取り組み中に怒り、大号泣した姿を見る事でAちゃんの中に何か感じるものがあったのではないかと。そしてそれは、保育者が言葉だけで言って聞かせようとするだけは、絶対に生まれなかった感情だといえる。
- それ以降、Aちゃんが何か困ったり、不機嫌になっているとBちゃんが来て、遊びに誘ってくれたり、時には「それじゃダメだよ！」と諭してくれたりするようになる。その様子を見ていた、Aちゃんに対して、今まであまり関わりをもとうとしなかった子たちも関わりをもつようになり、一緒に遊び、手助けをしてくれるようになった。
- これらのやりとりがあった事は、Aちゃん・Bちゃんの保護者にも報告。どちらか一方だけのサポートではなく、両者共に同じようにサポートしていく為にも、保護者との連携も大切にしながら、成長を見守っていた。

■ ワンポイント

- 対応が難しい子が、どうしたら集団としての生活を楽しみ、周りの子供たちの存在を受け止めていけるかを考えてみましょう。
- クラスの子たちがAちゃん存在や性格を受け入れられる為には、どのような工夫が必要か考えてみましょう。
- 今回Aちゃんを受けもっている間、年少・年中の先生からも情報の共有もあった為、支援に必要な課題や改善点を職員間で話し合う事が出来ました。クラスの担任の先生だけが悩みを抱えたり、考えこんだりするのではなく、全職員で情報を共有し改善していけるような環境をつくっていくことも子どもたちの為に必要なのだと思います。

あるある研修 「思いが伝わったら…」

■ 主な内容

- ・ 乱暴な行動が目立つN児（三歳）の話
- ・ 近寄ってきた友達や保育者をたたいたり、押したりしてしまう。
- ・ 自分の使いたい玩具を使えないと泣く。奇声をあげる。
- ・ 友達をものでたたいてしまう。
- ・ 「伝える」「伝わる言葉」の数が少ない印象。
- ・ 母はN児に関心、関わりが薄く、希薄に感じられる。

■ 幼児と保育者のようす

（みんなで好きな遊びを楽しんでいる。N児は、車の玩具で遊んでいたS児のそばに行き、何も言わないで、さっと車の玩具をとる）

S 児：「Nくんがとった。それ、Sが使っていたのに」

保育者：「そうだよ。今、Sくんが使っていたよね。」

「Nくん、これSくんに返してあげてね。」

N 児：「キィー」と言ってパニックになる。

（とった車の玩具でSくんをたたこうとする）

（止めるとよけいに「キィー」と大きな声を出す。）

保育者：「Nくん、落ち着いてね。」と抱きしめる。

「Sくんの使ってたのほしかったの？先生と一緒にSくんにかしてって言おうね。」

S 児：「いいよ、Nくんつかって」と言ってくれる。

（N児は表情が変わり、嬉しそうにしている。）

保育者：「Nくん、よかったね。Sくんにどうもは？」

N 児：「もーも」（どうも）

（その後、2人は一緒に遊び、他児も加わり楽しく遊んでいる。）

ワークシート

■ 協議してみましょう

○ 自園の乱暴な行動のお子さんにどのような関わりや言葉がけをしていますか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

○ 「伝えられない」お子さんにどのような配慮ができると考えられますか。

(個人思考)

(グループ・全体協議)

「思いが伝わったら…」

■ この園での取組

- S児の優しさでN児も心を許して楽しく遊べるようになったことなど、園内で話し合いました。
- N児の奇声や乱暴な行動について
 - ・友達と遊びたいけど、どうしたらよいかわからない
 - ・使いたい玩具があっても、貸してもらうのに伝える言葉がわからないので奇声を出してしまう。
 - ・関わり方が分からなくても、他の子が楽しく走っていたら、一緒に仲間になって笑って走る姿が見られた。
 - ・奇声を発してしまうことは多いが、自分の好きな遊びをじっくり行っている姿もある。
 - ・自分の遊んでいるものが取られると、N児は怒って奇声、たたくといった乱暴な行動になる。
 - ・S児は言葉で何でも伝えられる子であり、N児を誘って、声を掛けてくれる。
 - ・その姿を周りの子にも秘技供養に褒めていくことでN児に対して、他の子も声を掛ける姿が見られるようになってきた。
 - ・2歳児では、自分の欲しいものは、ほしがってしまう。
 - ・N児は4月時点で1歳6～7か月の発達。
 - ・母は、N児への関わりが薄い。母の表情もあまりなく、N児も表情が乏しい。N児の本園での様子を伝え、友達とのかかわりの様子を伝えたり褒めたりして認めていけるよう働き掛ける必要がある。

■ ワンポイント

- ことばの不明瞭さがあり、やりとりがうまく出来ない
- 感情を伝えられない→様々な場面で使える言葉を知らない。
- N児の気持ちをくんで「これがしたかったの？」と具体的にものを見せて確認する。
- 気持ちの代弁は難しいが、寄り添い、分かろうとすることで楽しく生活できるようにすることを目指す。
- 3歳児検診もあるため、母とN児の行動を共有して保健師との話し合いにつなげる。母の心配な点を聞いて、N児をどのようにサポートするか確認していく。